

(Homoptera: Aphididae) attended by the ant *Pristomyrmex pungens* (Hymenoptera: Formicidae). Applied Entomology and Zoology, 42: 181-187.

河田和雄, 1992. 岡山市周辺におけるフナガマダラオオアブラムシの発生. 中国昆虫, (6):13-16.

河田和雄・山下 泉, 1992. フナガマダラオオアブラムシの日本からの発見. 日本応用動物昆虫学会誌, 36: 247-251.

中沢啓一, 1992. 広島県におけるフナガマダラオオアブラムシの発生状況. 中国昆虫, (6):17-22.

佐々治寛之, 1998. テントウムシの自然史. 251pp., 東京大学出版会.

高橋 滋・稲泉三丸・香川清彦, 1994. B301 フナガマダラオオアブラムシの生活環 (生活史・休眠・光周性). 日本応用動物昆虫学会大会講演要旨, (38): 28.

山本栄治, 1982. ヨツボシテントウの食性に関する2,3の知見. 四国虫報, (26): 148-150.

(吉富博之 愛媛大学ミュージアム)



「学名論—学名の研究とその作り方」

平嶋義宏著 2012年発行

定価3,200円 東海大学出版会

A5版, xiii+347 pp. ISBN978-4-486-01923-7

本書を手にして最初に印象的だったのは、それが実に軽快であることだった。著者の平嶋氏はすでに、氏の学名研究の集大成として、大冊の「生物学名辞典」(平嶋, 2007, 東京大学出版会, 東京, xxii+1292 pp.)を上梓している。この本はしかし、著者自身が最初のはしがきに書いている通り、一般の昆虫愛好者や初学者、学生が手に取るにはあまりに重厚で敷居の高いものである。本書はむしろ、これから学名を学ぼうとする、あるいは昆虫分類学に進もうとする意欲を持った初学者、学生にとっての最初のステップとして、入門書として最適である。

平嶋氏のこれまでの学名に関する本の中では、写真や図が示されていたものの、すべてモノクロだった。しかし本書では、所載の写真の多くがカラー印刷になっている。本書を読み進んでいくと、これらのカラー写真は実に、実際の生物を活写したものであり、学名の理解を手助けするように配されている。生物の色を巧みに表現した学名は数多い。それらの学名がいかにか巧みであるかは、これまで実際の生物を手に入れるか、その種のカラー写真を探し回らなければわからなかった。しかし本書では、少なくとも写真が出ている種では、即座に学名の意図するところを理解できるようになった。写真がカラーに



なったことは、見た目豪華で、読んでいて楽しいばかりでなく、その意義は非常に大きい。

甲虫研究者にとってうれしいのは、クワガタムシ、ハネカクシ、アリヅカムシその他甲虫の学名の解説が今回ふんだんに盛り込まれていることである。甲虫界では、あまりにも多くの種があり、日本産の多くの種に19世紀~20世紀初頭のヨーロッパ人があまりにも無難な命名をしている。その後の日本の研究者には、そのようなお決まりの命名では飽き足らない人たちが少なくないようで、一見難解な、凝った命名が少なからず見られるようだ。平嶋氏が本書によって、それを懇切に解説したことは甲虫界にとっては極めて有益なことといえる。

本書は全編を通じて、これから新たな学名を生み出そうとする昆虫分類学者の立場に立っており、言い換えれば、新種名をつける立場に寄り添って書かれたものである。これは将来、そのような立場に立つであろう初学者や学生を含めて、学名に使われている古典語の奥深さを再認識させ、その正しい使い方へ導く力が感じられる。学名を構成するラテン語は我々アジア人にはなじみの薄い言葉であり、初学者や学生の学ぶ機会が少ないことは仕方のないことだろう。しかしたとえ欧米人であっても、最近の若い研究者の間では、これらの言葉と学問の基本である古典語に対する知識と理解が希薄なことは大変残念なことである。本書がそのような風潮に一石を投じるものになることを願ってやまない。

(国立科学博物館動物研究部 野村周平)